最終報告書レポート

プロジェクト「東南アジア諸国のレジデンスに参加して、アジア人のそれぞれの感性の共通点や差異を理解し、日本人アーティストとしての新たな活動の方向性を展開させる。」の活動報告

増山　士郎

タイはナンの Asiatopia House でのレジデンス

2017 年 12 月 22 日～ 12 月 23 日
タイ到着研修開始 Concrete House/Empower Foundation 滞在
2017 年 12 月 23 日～ 12 月 24 日
バンコクからナンまで車で移動
2017 年 10 月 24 日～ 12 月 6 日
ナンの Asiatopia House レジデンス滞在
2017 年 12 月 6 日～ 9 日
Asian Culture Station でのトークのためチェンマイ滞在
2017 年 12 月 9 日～ 12 日
ナンの Asiatopia House レジデンス滞在
2017 年 12 月 12 日～ 12 月 19 日
チェンライ美術館での個展のためチェンライ滞在
2017 年 12 月 19 日～ 12 月 27 日
バンコクリサーチのため Concrete House/Empower Foundation 滞在

2011 年の日本の福島原発事故以降、また、アンチグローバリゼーションの運動が世界中で盛り上がりを見せている現在、世界で自然と共生し自給自足で暮らす人々の生活に興味がわくようになりました。Asiatopia House での生活は現在自分が理想的と考える自給自足の生活に限りなく近いものでした。ディレクターのチャンポンと奥さんのノイが毎回の食事を料理してもてなしてくれました。ほとんどの野菜や果物が科学肥料無しで育った彼らの庭や近所で採れたものであり、完全な有機栽培のものです。肉は近所で育った動物です。自然の一部になって自給自足的な生活をしていることを肌で感じるナンの小さな田舎の村での生活は、現代の都会の生

Attracting Sprits

Attractive

活よりももっと自然で人間的な生活だと実感できました。

そして、この自然と共生する小さな田舎の村に滞在しながら考えたことをもとに作品をつくりました。自分は活動初期から、社会と関わるアートを制作してきました。コミュニケーションのインターフェースやプラットフォームとなるハードウェアを制作し（建築学科のバックグラウンドが元になっていると思います。）、建築同様人々が参加することによって完成するタイプの作品をつくってきました。それが、2012 年より羊、アルパカ、らくだ等の動物もそのミュニケーションの対象として取り入れ、更に地域の人々と共同でプロジェクトを完成させるようになりました。今回は自然と共生しながら生活する中で、日常触れ合う昆虫や動物、村人、学生から幽霊までコミュニケーションの対象としました。二ヶ月間の滞在で、日本とタイの食文化、住空間の違いも学び、それらを踏まえ、滞在環境で手に入いる多くの自然素材を活用して作品を作りました。

ナンでのレジデンス滞在終盤 12 月 1 日には村の人々を招いて、多くの人々が食べたことのないであろう、日本の家庭料理をもてなすイベントを行い、同時に作品も披露しました。また、チャンマイのアジアン・カルチャー・ステーションにてチェンマイにレジデンス滞在していたアーティストの石黒昭君と二人で 12 月 8 日にトーク・イベントを開催しました。レジデンスの滞在成果を見せる個展は 2017 年 12 月 15 日から翌年 2018 年 1 月 20 日まで Chiang Rai Rajabhat 大学所属のチェンライ美術館で開催しました。個展のタイトルは、「Attracting My Neighbors」です。この「Neighbors」は、日本人の自分にとっての、近隣国のタイの人々、滞在している村の近所の人々、滞在中自分に群がってくる昆虫、近隣から敷地に侵入する動物、幽霊まで多くの意味を含みます。プロジェクトの一貫で世界中がアーティストが訪れるアジアトピアハウスに是非必要だと思った、タイの地域コミュニティのシンボルでもあるサラ（東屋）を作りました。

Attractive or not?

インスタレーションビュー

サラはチェンライ美術館での展覧会終了後、Asiatopia House の庭に再び移設し恒久的に設置してもらい寄贈しました。

バンコクでリサーチで回ったのは Bangkok CityCity Gallery, Nova Contemporary, Bangkok Art and Culture Center, S.A.C. Subhashok The Arts Centre, バンコク国立博物館 , タイ国王の葬儀の展覧会です。バンコクはタイの他の都市よりアートシーンが大きいと思いましたが、インドネシアのジョクジャカルタのアートシーンと比べると、実験的な活動が多くはなくて、より商業的できれいにこじんまりとまとまっているものが多いなと個人的には感じました。バンコクで会った関係者はアーティストの Sarawut Chutiwongpeti、バンコクでメディアアート系の大学教授の Komson Nookiew です。二人とも将来的に自分と一緒にプロジェクトをやることに興味をもっていましたので、ポジティブなミーティングができました。

自分の作ったサラを使いナンの村で人々に日本の家庭料理を振る舞う

Attractive

インドネシアはジョグジャカルタ Ruang MES 56 でのレジデンス

2017 年 12 月 27 日～ 2018 年 2 月 24 日

アジアのアートシーンで最も熱いのがインドネシアでもとりわけジョグジャカルタ (略称 ジョグジャ) だと、信用できる多くの美術関係者が口にするのを、ここ数年よく聞いていました。ものすごく滞在してみたかったのですが、おかげさまで、ついに念願がかないました。ジョクジャのアーティストや創造的な人々はジャンルに限らずどのような創造活動に関しても好奇心が強く、新しいものであっても、伝統的であっても、実験的なものであっても、いかなる創造的な活動に対しても見たり、参加したりすることに常に興味があると感じました。それがゆえに、人々はジャンルを横断した実験的な創造活動にも敏感で、そのような創造活動が始終開催されている街です。そんな創造力で溢れたジョクジャの街の虜になりました。ジョクジャのアートシーンのもう一つの魅力は、ここに存在する多くのアート組織がアーティスト主導のアーティストコレクティブの形体をとっていることで、その団体の横のつながりや結束は強く、それらが各所でアーティストや創造的な人々のコミュニティを形成しています。自分が滞在した MES 56 もメンバーが 20 人強いるアーティストコレクティブの団体で、写真や映像ベースの団体です。インドネシアはイスラム教の国のため、お酒がどこでも飲めるわけではない社会ですが、MES 56 にはバーが併設されており、毎晩のように海外からの人物も含めて多くの美術関係者飲みに集まってくるジョグジャの重要なアートコミュニティです。

そんなコミュニティで、自分が今まで社会と関わるアートをやってきたように、メスのメンバー全員を巻き込み、彼らとのコラボレーション

Identity T-Shirts Project with MES 56

で、写真ベースのプロジェクトを実現することにしました。文字の入ったＴシャツをお店で買う時、自分のアイデンティティに合ったＴシャツを発見するのがいつも難しいなと常に思っていました。メス 56 のメンバーも作品も個性も多様でそれぞれ違います。各々のメンバーに相応しい文字の入ったＴシャツをそれぞれ作り、全員に着てもらいグループ写真を撮影しました。写真が専門の MES 56 とのコラボレーションで自分の思惑通り、クオリティの高い写真が完成しました。そのグループ写真を撮影した場所は MES 56 のメンバーのほとんどが卒業した地元の大学 Indonesian Institute of the Arts, Yogyakarta の写真学科にあるフォトスタジオです。 メンバーの２人は大学を卒業せずに中退したという話を聞いていたので、卒業アルバムに載るようなグループ写真を彼らが勉強した大学で撮影したことも面白いなと思いました。その後、２月 21 日に、その大学の写真学科で２時間の講義をするよう依頼を受けました。一時間のトークの後、学生と一緒にワークショップを開催しました。

Ruang MES 56 では１月 11 日、２月 19 日の合計２回のトーク開催。１月 17 日、24 日、31 日に「Self Sufficient Life」シリーズ３作品のビデオスクリーニング開催。そして滞在制作の成果を見せる個展を２月 15 日～ 21 日まで開催しました。個展のタイトルは「Intervention」。基本的に今までの自分の活動のキーワードになる言葉です。最近ソーシャリー・エンゲージド・アートという言葉がよく使われるように、建築を学んだバックグランドがある自分の活動は建築同様、多くの活動が人々や社会を巻き込んだ活動であり、建築同様、場所に根ざした作品です。メインの MES 56 とのコラボレーションによる写真作品の Identity T-shirt Project の他、MES 56 の環境の多くの些細な問題（困難）にリスポンスしながら、コミュニティに介入する形で、いくつかのサイトスペシフィック･インスタレーションを制作しました。Ｔシャツ､グループ写真､バスルー

MES 56 and Shiro with Lastrek

Shishi-odoshi

ムのインスタレーション、グループ撮影に使用した踏み台等、いくつかの作品は、タイでの滞在時同様、自分がレジデンスを終了した後も、そのまま MES56 のコミュニティにそっくり残して寄贈しました。

　また、同時期にジョグジャカルタにレジデンス滞在していた小川格さんが３月22日～29日まで､同じくジョクジャカルタのAce Houseで｢MEI MEI Art Jogja｣というグループ展を企画することが決まったので、ジョグジャカルタを去る前に出展作品を３点残しました。

Pure Room

Indonesian House

マレーシアはクアラルンプール Lostgens' Contemporary Art Space でのレジデンス

2018 年 2 月 24 日～ 3 月 31 日

マレーシアはクアラルンプールの Lostgens' Contemporary Art Space でレジデンスを始めて、日々毎日考えさせられた大きなことは、この社会が、マレー系、中華系、インド系の人々の三つの大きなコミュニティによって分断されているということです。ロストジェンは中華系の人々によって運営されているので、レジデンス中は中華系の人々と接する機会がより多くありました。

ある日、ロストジェンのディレクターのヤオがロストジェンの友達皆と行く日帰り旅行に誘ってくれました。多くの中華系の人々の他に一人のマレー系の男性が旅に同行しました。旅の道中彼によく話しかけました。途中皆で中華料理屋に入りましたが、彼はイスラム教を信仰しているために、皆と一緒にご飯が食べられなかったと後になって聞きました。そして彼が気の毒だなと思うのと同時に、異なる食文化がこの社会に障壁をつくっていることに気付かされたのです。

ご飯を一緒に食べることはお互いのことを理解するのに重要なことだと思うので、3 月 24 日から 29 日までロストジェンで開催された自分の個展「Encounter/ 出会い」のオープニングのために、インド系イスラム教の料理人ママックを雇い、この社会で皆が食べられる料理をオープニングのために料理してもらうことにしました。そのイベントのために豚と牛禁止のロゴをデザインし、ディナーテーブル用のテーブルクロスと料理人が使うエプロンにそのロゴを入れました。

この展覧会のオープニングのイベントが、人種や種族のコミュニティを

インド系イスラム教の料理人ママック

オープニングのために用意した食事

超えた出会いを促進するきっかけになればいいなと考えたのです。レジデンスを通じて、事前には予想だにできなかった様々な種類の「出会い」がありました。展覧会場のギャラリーの壁面にタイムラインを作り、それらの様々な出会いを時間軸に沿って一同に展示しました。

ロストジェンでは個展の他３月７日と３月29日にトークを二回開催しました。その他、キュレーターのSuzy Sulaimanから彼女がキュレーションしている展覧会「On The Uses and Abuses of Visibility」の一貫で開催する、アーティストの自治とソーシャリー・エンゲイジド・アートに関するパネルディスカッションへの参加依頼を受け、３月25日にイベントに参加しました。

クアラルンプールのレジデンスはタイやインドネシアの半分の一ヶ月しかないにもかかわらず成果を見せる個展もスケジュールにきっちり組んだことが、かなりのストレスとプレッシャーをもたらしました。それでも満足のいく内容とボリュームの展覧会が開催できたと思います。

過去16年間世界各地のレジデンスに滞在しながらノマドで活動をしてきましたが、今回のロストジェンがキャリア通算20個目のレジデンスとなりました。今回の経験から、レジデンスの滞在最後に成果を見せる展覧会も開催する場合、最低1.5～２ヶ月は滞在期間があった方がいいなと思いました。12年前の2006年に香港で一ヶ月間のレジデンスをして展覧会をした時も同様に超絶ハードだったことを回想しながら、改めて１ヶ月はキツイなと痛感させられました。

オープニングで食事を食べるお客さんたち

オープニング後のインスタレーションビュー

まとめと今後の展望

今回、国際交流基金アジアセンターのフェローシップおかげで、これまで縁のなかったタイ、インドネシア、マレーシアの発展途上国３カ国に滞在し、それらの国々の社会や文化や人々のことを知り、それらの経験をもとに自分の中では新しい方向性の作品を制作し発表することができました。

日本に比べたら経済的には決して豊かではない国々で、経済的に豊かな国の日本の運営する助成制度を受けてやって来た日本人アーティストとして、常に考えていたことがあります。最近世界各国でアンチグローバリズムの運動が盛んになっているように、自分自身も我々が生活している資本主義社会に対して最近疑問を抱きはじめています。そんな中、まだ資本主義社会では発展途上の今回滞在した貧しい国々で、豊かな国のアーティストの自分がどのようにお金を使うべきか、ということをずっと考えていました。

例えば、インドネシアのジョグジャカルタの Ruang MES 56 にレジデンス料金と一緒にアシスタント料金を払いましたので、若いメンバーの Fajar が二ヶ月付きっ切りで世話をしてくれました。それでも彼のサラリーは日本の雇用費の 10 分の 1 にも満たない金額でした。腕のいい写真家にも関わらず、カメラも買えない、彼の生活を見て、貧しい国にやって来たお金のある外人アーティストとして、ギブ＆テイクであれば、テイクよりもたくさんのギブをすべきだろうと思いました。そうして、インドネシアはもちろん、それぞれの滞在国の地域コミュニティで、アーティストとしてお金を使い、作品で貢献するのであればどういったプロジェクトをすべきで、どういったプロジェクトが自分が去った後でさえも、コミュニティに何かしらの影響を残しうる存在になるだろうかということを、常に考えながらこの半年間の活動をしました。レジデンス後に作品をあちこちで寄

Asiatopia House に寄贈したサラ
チャンポンが持っているタイ語の意味は「自分の心は友情と共にゆく」

贈してきたのもそんな心情からです。

タイのナンの村では自分の活動が未だに語り継がれていて、寄贈したサラが地元では「士郎のサラ」と呼ばれているらしいです。ナンの地元の小学校の校長からも生徒たちに美術を教えて欲しいと言われました。展覧会開催したチェンライの大学の主任教授チャクリットもまた一緒に仕事をしたいと言われました、他にもバンコクで会ったサラウやコムソンも将来的に仕事を一緒にすることに興味を持ってくれていました。

また、インドネシアはジョグジャカルタでの活動は Ruang MES 56 を始め、地元のアートコミュニティでもすこぶる好評でした。最後には MES 56 のメンバーと友達全員から「ありがとう～♬ありがとう～♬士郎増山～♬」と日本語で大合唱され、メンバーが自分のための「士郎増山」が歌詞に入った曲を作詞作曲して何日も練習した上で、個展のオープニングや送別会の時にバンドを組み演奏してくれた程でした。これはさすがに目頭が熱くなりました。今後も更なる展示やプロジェクトによる再来訪するなど、彼らと更なる関係が築ければなと考えています。

マレーシアは時間が短かったこともあって、タイやインドネシアで構築できたような深い関係が築けなかったのが少々心残りではあります。

ジョグジャカルタを去る前に MES 56 に寄贈したグループ写真のバナー